—論文—

高岡短期大学紀要　第8巻　平成8年11月
Bull.Takaoka National College, Vol.8, November 1996

中国語を母語とする日本語学習者の言語習得過程における若干の問題
－「生活言語」と「学習言語」をめぐって－

山田眞一

（平成8年6月28日受理）

要　旨

この数年，日本の小・中学校においては，帰国子女，外国人子女の数が増加し，そうした児童・生徒に対する日本語教育が急務の課題となっている。母語の習得形成期にある学習者が日本語を第二言語として学ぶ際に生じる言語上の問題を解決するには，母語を獲得した学習者が日本語を学習する場合とは異なった視点からのアプローチが必要である。

本稿では，中国語を母語として言語形成期にあった者が，日本語を第二言語として学習する場合に問題となる点を，「生活言語」および「学習言語」といった言語の二つの層という観点から考察したものである。本稿で得られた結論は次のようなものである。

日本語母語話者であれば，「生活言語」である和語から「学習言語」である漢語へと段階を経て習得される言語の層が，中国語の母語形成期にある日本語学習者は，「生活言語」よりも先に，「学習言語」が不完全な形でインプットされており，そうした学習者への日本語教育においては，日本語の「生活言語」に対応する中国語の「生活言語」に気づかせるような方法が有効であろうということである。

キーワード

中国語，日本語教育，生活言語，学習言語

1　はじめに

中国語圏*[1]で生まれ，中国語という言語環境で一定期間過ごした者が，日本で生活し，日本語を学習する際に生じる言語上の問題は，日本語と中国語の対照言語学の領域に属する。従来この分野の研究対象は第一言語を中国語とする者が外国語として日本語を習得する場合，あるいはその逆に第一言語が日本語である学習者が外国語として中国語を習得する場合を前提としており，母語の形成過程にある学習者を対象としたものではなかった。本稿は，中国語を母語として習得過程にあった者が，第二言語として日本語を学習する過程において生ずるであろう言語上の問題について述べようとするものである。そのためには，当該学習者を相当の期間継続的に観察してはじめてその実証的かつ説得力のある分析が可能となるのであるが，小論では，バイリンガル教育の理論的枠組みをふまえ，言語の二つ

産業情報学科

の層という観点から考察を進め，今後の調査につながるような問題について論じてみたい。

2 「生活言語」と「学習言語」

バイリンガル教育における理論的枠組みとして，Cumminsは言語の層をＢＩＣＳ（Basic Interpersonal Communicative Skills）とＣＡＬＰ（Cognitive/Academic Language Proficiency）の二つに分けている。[1]この二つの用語は日本語では，「基本的対人伝達能力」と「認知・学習言語能力」[2]，あるいは「生活言語」と「学習言語」（学校教育にあっては「教科用語」に相当）などと呼ばれている[3]（以下便宜上，本稿ではＢＩＣＳを「生活言語」，ＣＡＬＰを「学習言語」と称する）が，別のことばで言い換えるならば，「生活言語」は日常生活の場面における伝達能力を指し，「学習言語」は抽象的な内容を場面に依存せずに伝達する能力を指しているといえよう。言語のこの二つの層のうちとりわけ「学習言語」の習得が，より知的な活動を行う場合には不可欠になる。

ところで，自然な状態における子供の言語の習得・発達は５～６歳で文法的な知識を身につけ，９～10歳頃には論理的思考が発達し，母語が決まると言われている。[4]母語が決まった後に第二言語を学ぶ場合には，「学習言語」の核も確立しているので抽象的な内容の伝達を担う能力の下地はできているといえるが，母語が決まらない内に新たな言語環境に置かれた場合に，「学習言語」をどのように習得するかという問題が生じることになる。ここに帰国子女や外国人子女に対する日本語教育における，学習者の母語の伸長という点が強調される意義がある。このことは，親と子供とのコミュニケーションという問題のみならず，学習者の知的活動の発達を左右することになるという点においても重要な意味を持つことになる。

日本語においては一般的に言って大和言葉が「生活言語」で，漢語で表現される熟語が「学習言語」であるという指摘には異論をはさむ余地はなかろう。[5]そして通常は「生活言語」から習得がはじまり，学齢期になって「学習言語」の習得がなされるといえる。日本語を母語とする者にとってはこの「生活言語」から「学習言語」へという習得の順序も，第二言語として日本語を学習する者，ことに中国語を母語として習得過程にある者にとっては必ずしもそうとはいえないというのが，小論で述べようとすることである。

3 理科の教科書の比較から

「生活言語」から「学習言語」への橋渡しになり得る学校の教科のひとつとして，「理科」が挙げられている。[6]それは，「理科」という教科が日常生活における経験と結びつけやすいという面を持っていることの他に，その教科書に現れることばにおいても「生活言語」から「学習言語」へのつなぎとして有効であるからであろう。そうであるならば，理科の教科書の語彙を調べることで，その言語の「生活言語」と「学習言語」のかかわりを知ることが可能になる。そこで小論では，日本と中国の理科の教科書の対応する部分を比較することで，両言語における「生活言語」「学習言語」の具体例に検討を進めることにする。

次に挙げるのは，日本と中国の理科の教科書に見られる「力（ちから）」についての説明である。

まず，日本の教科書（『新訂中学校理科１分野』大日本図書，1992年2月初版）でどのように記されているかを見ると，

力とは

わたしたちは，「力を出す」とか，「力がいる」などということばをよく使う。

力は目には見えないが，どんなときに力がはたらいている，というのだろうか。

とある。

この記述から分かることは，「力（ちから）」が「生活言語」であるということであるが，「圧力」「浮力」などといった「～力（りょく）」といった熟語が「学習言語」であることは容易に理解されよう。

一方，中国の教科書(『义务教育三年制・四年制初级中学校教科书(实验本)物理第一册』人民教育出版社物理室，中国教育学会理教学研究会编著，1990年10月第1版）では次のように記されている。

> 什么是力(力とは)
> 我们常常使用“力”这个字，常常说“注意力”，“理解力”，“说服力”等等词，力这个字的含义是非常广泛的。在物理学中我们也要研究力，只是在物理学中力含义要狭窄得多，也要确切得多。那么，什么是物理学中的力呢？
> （私たちはよく「力」という字を使い，「注意力」「理解力」「説得力」などといった語をよく口にする。「力」という字の意味はとても広く。物理学においても「力」を研究するが，物理学での「力」の意味はずっと狭く，ずっと正確である。では，物理学でいう「力」とはなんだろうか。）
> （下線は山田）

この二つを比べてみると，中国の教科書の記述と日本の理科の教科書の記述は一見似ているように思えるが，ここには，日本語と中国語の「生活言語」と「学習言語」の違いの一端がうかがえる。つまり日本語では「生活言語」である「力（ちから）」が中国語では「生活言語」ではなく，日本語では「学習言語」であるものが中国語では日常的に耳にし，口にすることばとなっているのである。このことは，日本語では一般的に「学習言語」が漢語の熟語に相当するということから考えると当然といえようが，問題は中国語では“力”が「生活言語」ではないので，中国語を母語として習得過程にある生徒が第二言語として日本語を学習する過程においては，日本語を母語とする者とは逆の方向の習得過程を考える必要があるということにある。

中国語では“力”が「生活言語」でないということを結論づけるには，この理科の教科書の記述だけでは，不十分であるかもしれない。そこで，“力”という字が中国語の話しことばにおいては単独に用いられるかどうかについて，日中辞典の用例および，中日辞典の語釈をもとに具体例を挙げてみよう。

『日中辞典』（小学館，1987）では，

「力がある」　＝　“有力量”
「力が強い」　＝　“力气很大”
「力及ばず」　＝　“力不从心／无能为力”

というような用例が挙げられている。さらに，『中日辞典』（小学館，1992）では，「“力”が単独で用いられることはなく，“他很有力气”のように2字以上の言葉として使われる。」

と説明されている。

このように，中国語の話しことばにおいて“力”が単独に使われることはなく，単独に使われるのは，成語のように熟した結びつきの場合である。“力”が単独で使われることがない以上，中国語における「生活言語」ではありえない。では，“力量”とか“力气”が日本語の「力（ちから）」に相当する中国語の「生活言語」といってよいであろうか。この点は判断の難しいところであるが，あることばが「生活言語」か否かを判断する基準は，それが日常会話において習得される層の言語であるという点にあるということができる。再び『日中辞典』（前掲）を調べると，

「力が抜ける」　＝　“没有劲儿”
「力を入れる」　＝　“使劲（儿）”

といった用例が見つかる。この“劲（儿）”が，中国語の話しことばで単独に用いられるものであれば，日本語の「力（ちから）」に相当する中国語の「生活言語」であると考えてよいであろう。

一般言語学の用語に従えば，ある言語形式がそれだけで独立して運用されるものを自由形式（free form）と呼び，独立して使用されないものを拘束形式（bound form）と呼ぶが，中国語の話しことばにおいて，“力”が拘束形式であり，“劲”が自由形式であるかどうかの判定は，中国語を内観できるネイティブスピーカーの言語学者による判断がもっとも信頼性が高いといえるであろう。この条件を満たしているものは，管見の限りでは，“CONCISE DICTIONARY of SPOKEN CHINESE（国語字典）”（趙元任，楊聯陞合編，HARVERD UNIVERSITY PRESS, 1947）しかない。出版年が古く，現代中国語とはいささか異なるのでないかと思われる箇所もあるが，本稿ではこれに従うことにする。この「国語字典」では，自由形式には頭文字をとってF，拘束形式にはBと記されている。「力（ちから）」という意味を表す漢字についてこの字典には次のように記されている（便宜上声調は省略し，原文の繁体字は簡体字に改めた）。

力．B strength 力气，力量 ・・・

劲．F strength, -l（-lは“儿化”するという意味）

ここから，“劲（儿）”は自由形式であるといえる。漢字一字で表される形態素が自由形式である場合，日常の話しことばで使われる語であると考えてよかろう。

日本語の「力（ちから）」に相当する中国語の「生活言語」は“劲（儿）”であるといえる。

このように日本語における和語で漢字一字で表されるものが，中国語では自由形式であるか，拘束形式であるかを知り，拘束形式のものについては，日本語と対応する自由形式の語を記しておくことは，第二言語として日本語を学習する者が「生活言語」から「学習言語」（あるいはその逆方向）への習得過程においては有益なことであろう。

4 理科の教科書語彙における漢字一字で示される和語と対応する中国語

「理科」という教科が「生活言語」から「学習言語」への橋渡しの役割を担う可能性があることから，日本の中学校の教科書に現れる語彙の中から，和語で漢字一字で表記されるもののうち使用頻度の比較的高いものを抜き出し，その漢字が中国語では自由形式か拘束形式かを示し，拘束形式である場合には，和語に相当する中国語の「生活言語」を示したものを資料として挙げておく。ここに挙げた資料だけでは不十分であるが，この種の資料が充実すれば，生活言語から学習言語への移行学習カリキュラムを考えたり，教材作成を考える上の一助となりうるであろう。

4.1 表の説明

日本の理科の教科書の語彙は『中学校教科書の語彙調査』（国立国語研究所報告87，国立国語研究所,1986）に基づいて，和語で漢字一字で書かれるM単位（語の構成にあずかる要素に基づく単位，すなわち形態素）のうち，使用度数が5以上のものを抽出し，さらに『中学校教科書の語彙調査Ⅱ』に基づき，その漢字一字であらわされる和語がW単位（文の構成にあずかる単位，すなわち単語）として機能するものだけを残し，それらを一覧表にして示した。また，その漢字が自由形式であるか拘束形式であるかについての認定は，おおむね“”CONCISE DICTIONARY of SPOKEN CHINESE（国語字典）”に基づき，同字典に記されていない文字については『現代中国語辞典』（香坂順一編著，光生館，1982年）*2により判断し，自由形式のものはF（free form），拘束形式のものはB（bound form）と記した。なお，「国語字典」でL（the literary style）と記されているものも，便宜上，Bと記した。

中国語BISCの欄は，中国語の「生活言語」ではどう表現されるかについて記したが，

あくまで参考程度の意味しか持たない。中国語における「生活言語」の定義と範囲については今後十分議論がなされる必要がある。

理科の教科書に現れる使用度数の高い87語と対応する中国語一覧

理科１上		漢　字	自由／拘束	中国語BICS	注　　釈
1	ちから	力	B	劲（儿）	
2	みず	水	F		
3	こと	事	F		
4	とき	時	B	时候（儿）	
5	もの	物	B	东西	
6	なか	中	B	里边（儿）	
7	め	目	B	眼睛	
8	て	手	F		
9	いと	糸	F	线	丝(絲)はシルクの意
10	うえ	上	B／F	上边（儿）	F＝乗り物に乗る
11	ところ	所	B	地方	
12	なに	何	B	什么	
13	した	下	B／F	下边（儿）	F＝乗り物から降りる
14	つぶ	粒	B	粒（儿）	
15	はり	針	F		
16	まえ	前	B	前边（儿） 以前	
17	あと	後	B	后边（儿） 以后	
18	しるし	印	B／F	记号	F＝印刷する。はんこ。
19	や	矢	B	箭	
20	かたち	形	B	形状	
21	くち	口	B	嘴	
22	ひ	火	F		
23	あいだ	間	B	中间，间隔	
24	ほのお	炎	B	火苗	
25	みぎ	右	B	右边（儿）	
26	ふくろ	袋	F		
27	かみ	紙	F		
28	な	名	B	名字	
29	ひと	人	F		
30	いし	石	B	石头	
31	いた	板	F		
32	いろ	色	B	颜色	
33	ひだり	左	B	左边（儿）	
34	さき	先	B／F	头儿	副詞としてはF
35	すみ	炭	F		
36	なか	仲	B	关系	
37	あじ	味	B	味儿	
38	き	木	B	木头　树	
39	そと	外	B	外边（儿）	
理科１下					
40	まめ	豆	B	豆儿，豆子	
41	あたい	値	B／F	价值	F＝ある値に相当する

理科1下		漢字	自由／拘束	中国語BICS	注釈
42	ひかり	光	F		
43	みち	道	B	路	
44	みどり	緑	F		
45	みな	皆	B	大家，全部	
46	かず	数	B	数儿	
47	あお	青	F		
48	たま	玉 球	F F	球（儿）	玉は宝石 球はボール
49	いま	今	B	现在	
50	き	黄	F		
51	たて	縦	B	竖	
52	むかし	昔	B	过去	
53	よこ	横	F		
54	あめ	雨	F		
55	うち	内	B	里边（儿）	
56	す	酢	B	醋	現代語では醋を使う
理科2上					
57	ほし	星	B	星星	
58	は	葉	B	叶子，树叶	
59	ね	根	F		
60	はな	花	B／F	花儿	F＝(お金等を）使う
61	たまご	卵	B	鸡蛋	
62	そら	空	B／F	天	
63	くき	茎	B	秆子，秆儿 梗子	茎は一般的なくき 稈は中空で節のあるものや根元から広がっているくき 梗は花，草，野菜の茎
64	ほね	骨	B	骨头	
65	くさ	草	F		
66	つき	月	B／F	月亮	F＝ひと月，ふた月
67	せ	背	F		
68	めす	雌	B	母的	
69	あし	足	B／F	脚，腿	F＝十分である 脚はくるぶしから下 腿は足の付け根からくるぶしまで
70	おや	親	B／F	父母	F＝口づけをする
71	いけ	池	B	池子，池塘	
72	えだ	枝	B	树枝	
73	かぶ	株	B	茬儿	助数詞としてはF
74	くだ	管	B／F	管子	動詞としてはF
75	にし	西	B	西边（儿）	
76	ひがし	東	B	东边（儿）	
77	むし	虫	F		
78	あな	穴	B	窟窿，眼儿	
79	ひ	日	B	太阳（儿）	
80	みなみ	南	B	南边（儿）	

理科２下		漢　字	自由／拘束	中国語BICS	注　　釈
81	つ　ち	土	F		
82	か　ぜ	風	F		
83	う　み	海	F		
84	か　い	貝	B	蛤蜊	左記は貝の１例
85	さかい	境	B	边界，界线	
86	や　ま	山	F		
87	は　い	灰	F		

5 おわりに

はじめに述べたように，この種の考察には母語形成期にある学習者をインフォーマントとする調査が不可欠であり，学習者個人の能力やおかれている言語環境の違いも考慮に入れた本格的な調査が今後の課題となる。

中国語を母語とする日本語学習者の学習過程が，「生活言語」から「学習言語」への過渡期にある場合，教科用語の対訳を示すことは母語の伸長という観点からも有益なことである。小論では，日本語の「生活言語」が欠落したまま，「学習言語」がある程度インプットされているような中国語を母語とする学習者にとっては、日本語の「生活言語」に対応する母語の「生活言語」についても併せて知ることの必要性を指摘するにとどまる。

注　釈

＊1　一口に中国語といってもその内部方言差は大きく，音声面のみならず，語彙，文法面においても方言間の差は小さくない。本稿でいう中国語とは，中国大陸において「普通話」，台湾において「国語」，シンガポールをはじめとする東南アジアにおいては「華語」と呼ばる，中国北方方言を母体とした共通語を指す。

＊2　同辞典の凡例によれば，「意味・働きがわかれているものについては，①②③ でそれを分け，独立した単語として用いられるものには，それぞれ品詞名を付した。したがって，品詞名のないものは，現代語では単語として用いられないことを示す。」とある。

引用文献・脚注

1）Jim Cummins, “Bilingualism and Special Education:Isuues in Assessment and Pedagogy” (MULTILINGUAL MATTERS 6,136-142.1984)

2）山本雅代「バイリンガリズムと誤解」(月刊『言語』Vol.20,No.8,26-27.1991)

3）梶田正巳「アメリカにおけるＥＳＬ教育理論と指導」(科学研究費研究報告書『日本語を母語としない子女に対する日本語の指導課程・指導方法の実践的基礎研究』,24-40.1994.4)

4）小野博「二か国語教育と言語能力」(月刊『言語』Vol.18,No.10,52-53.1989)

5）引用文献３)参照

6）同上

A problem on learning Japanese as a second language for Chinese native

— On BICS(Basic Interpersonal Communicative Skills) and CALP(Cognitive／Academic Language Proficiency —

Shinichi YAMADA

(Received June 28,1996)

ABSTRACT

At primary and secondary schools in Japan, students returning from overseas have been increasing in number lately;at the same time,children of guest workers residing in Japan have also become increasingly numerous in Japan's school system. Providing remedial Japanese instruction for these students is a matter of great urgency.

In this paper we give consideration to the adjustment processes of the children of Chinese native speakers,who face different challenges from most adult learners in attempting to efficiently learn Japanese as a second language.

When we discuss these issues,we use bilingual educational terminology first introduced by Dr.Jim Cummins. BICS(Basic Interpersonal Communicative Skills)are those first learned by children from their parents for the purposes of communication. CALP(Cognitive／Academic Language Proficiency)are more difficult skills learned at school from teachers and fellow students. Logically,you might assume that BICS must be completely learned before CALP can be attempted.

However,our conclusion is as follows. When learning Japanese as a second language, native Chinese speaking students may be able to partially acquire CALP before completely having mastered BICS.

KEY WORDS

Chinese, JSL(Japanese as Second Language), BICS(Basic Interpersonal Communicative Skills), CALP(Cognitive／Academic Language Proficiency)